

於久昭臣氏（元大平首相秘書官）に聞く

遊説で日本中をお供して

―聞き手・阿部 穆



クリスチャン首相の伊勢神宮参拝として当時、話題になった一駒。大平首相の左側で和傘をさしているのが於久昭臣秘書官（1980年1月4日）

大平総理に「初めまして」とご挨拶

——総理官邸には外務、大蔵、通産、警察の四省庁が秘書官を出しているんですが、於久さんは、大平総理の秘書官に任命された時、どこにおられたんですか。

於久 当時、警察庁の教養課長をしておりました。直属の上司である人事担当の警務局長から呼ばれて行ったところ「総理秘書官に予定しているので準備をしておくように」とのことでした。実は私は、以前、国家公安委員長の秘書官を木村武雄、江崎真澄の両大臣の時代にしておりまして、秘書官は卒業したと思っていまして、無駄だとは思いつつも「秘書官を二回もさせるとはいささか酷ではありませんか」と抵抗したんですが、敵もさるもの、ちゃんと調べていて「君だけではない、先例がある」と一蹴されてしまいました。刑事警察が長く、国内派をもつて任じていた私がどうして選ばれたのか。一二月という、第一線警察が忙しい時でもあり、動かしやすい教養課長をということでは白羽の矢がたったのかも知れませんね。内閣ができる数日前でした。

——それで官邸へ行ったわけですが、最初に大平総理と会われた時のことが忘れられないとか。

於久 総理が、国会での首班指名を終えて官邸入りして最初にすることは、秘書官に辞令を渡すことなんです。呼ばれて執務室に入り、総理から辞令をもらいましたが、つい「初めまして」となるともドジな言葉を発してしまっただんです。私は、娘婿で大蔵省の森田一さん、通産省の福川伸次さん、外務省の佐藤嘉恭さん達とは違って、大平総理とは全くの初対面でしたので、緊張していたんですよ。それにしても、これからお仕える総理に「初めまして」とは。もう少し気の利いたことを言

えなかつたんでしようかね。組閣の後の皇居での親任式、認証式に、早く総理に馴染んでもらおうということでお供をしました。総理車の後部座席の、左に総理、右に秘書官と座るのですが、固くなるなど言うほうが無理で、慣れるまでは大変でした。

—— 於久さんは身体が大きく押し出しがよいので、よかつたんじゃないですか。

於久 それは違います。大男は秘書官には向きません。私は、身長が一七七センチメートルあります。乗り物やエレベーターの中などでは首が突き出て、どうしても人を見下ろすような格好になつてしまい、どうにもおさまりが悪い。特に総理の鞆を持つ身としては……。だから、いつも少し後ろに下がって、なるべく控えるようにしておりました。

—— それで実際にお仕えて、大平総理はどんな感じでした。

於久 私は、正直いつて政治に対する関心が薄く、大平総理についての知識も「アーウー」と非常に慎重に発言する政治家といった程度でした。秘書官の内示をもらつてから、本屋で『私の履歴書』など数冊を買って読みましたが、現実にお仕えた総理は、見識といい、人間性といい本当に素晴らしいお方でした。一番驚いたのは、あの「アーウー」がどこかへ行つてしまったことでした。国会でも、街頭でも、総理の発言は、巧みな表現を織り交せて、言語明瞭、意味も明瞭でなかなか説得力がありました。総理になられてからは、最高責任者としての自信であのように変身されたのかな、と思つていましたが……。テレビ局でしたか、官邸でしたか、チビッコ達と会われた時に「大平総理はどうして「アーウー」と言うんですか」と聞かれて、大いに照れて頭をかいておられた姿が目に見えて浮かんできます。

実 — 総理が就任されて間もなくの頃、暴漢が官邸に入ってきて、総理に危害を加えようとした事件がありましたね。

去 華
総理官邸での暴漢侵入事件

於久 あの日は、日程が終わった後、公邸を見ようということになって、廊下伝いに、官邸から公邸に行ったんです。視察が終わり、その日の当番は佐藤秘書官だったので、私は、玄関に向かう総理と別れて官邸に戻るべく背を向けた時でした。急に騒がしくなっただけで振り返ると、一人の男を総理車に押し付けて抵抗を封じているSPキャップの杉森偵警部の姿が目に入りました。男の手には刃物が光っていました。総理は、サブの松井茂警部がガードしていて、玄関の中で無事でしたが、外には、官邸クラブの記者諸君が大勢いて、大騒ぎになりました。男は右翼の思想にかぶれて、派手なことをやって名をあげようとした若い男でしたが、一瞬の出来事で、本当に肝が冷えました。

— どこから侵入したんですかね。

於久 夜、塀を乗り越えて侵入し、記者クラブの中に潜んでいたようです。クラブでは、皆どこの社の新顔がきたなと思つて怪しまなかつた、と聞きました。官邸に侵入されたことといい、記者クラブの中に長時間いて怪しまれなかつたことといい、盲点をつかれたという大きな教訓でした。

— 毎日新聞の飯野忠男記者が「あんた、どこの社だ」と聞いたら、適当なことを言つたらしいですね。そういう危なかつたケースは、それだけですか、於久さんの在任中……。

於久 幸いにもこれだけでした。この事件は、総理に被害はありませんでしたが、警察当局にとって、警備の難しさを改めて教えられた事件でした。

——ところで於久さんの担当は何でしたか。

国内遊説に随行しての思い出

於久 私が担当したのは、防衛、自治、法務その他の、財政、経済、建設などを除く内政一般でしたが、各種選挙の応援、当時盛んだった政経文化パーティーへの出席などの国内の遊説の随行も受け持っております。

——その政経文化パーティーは、ほとんど毎週のようにありましたね。

於久 波があるんです。普段はそれほどありませんが、選挙の風が吹き始めると、各地で資金集めのパーティーが計画され、党の看板である総理に来薦の要請が集中します。

——そうすると、於久さんは随分忙しかったんでしょね。

於久 いや、そうでもありません。選挙の時もそうなんですが、こうした遊説は自民党総裁としての行事なものですから、党の遊説局が取り仕切るんです。海野雅裕さんなどが地元の県連と連絡をとってスケジュールの大枠を決め、官邸に連絡してきます。現地までの交通手段や現地での移動手段の確保、宿舎の手配なども遊説局の仕事です。秘書官としては、それに乗っかっていければいいわけで、役目としては文字どおりの鞆持ちでしたが、ただ一つ、気が抜けないものに記者会見がありました。

——記者会見は必ずあったんですか。

実 於久 政経文化パーティーの時には、パーティーの前か後で、必ずありました。日程にもよりますが、三、四〇分くらいを折半して、前半が地元の記者団、後半に官邸からの同行記者団というパターンでした。同行記者団の質問には、いつものことですから、特別に準備することはありませんが、問題は地元記者団です。ローカルな問題が多く、いきなりでは答えようがありませんので、予め質問の要旨を教えてくださいました。党本部をへて質問事項が届くと、関係省庁に割り振って答弁要領を作ってもらいます。込み入った問題や答弁に地元の意向を反映させたほうが良いと思われる問題などは、直接、地元県連に電話して確かめていました。多少、添削して完成させ、総理には、車中で目を通してもらっていました。

—— 於久さんが遅れそうになり、パトカーに送ってもらったことがあったとか……。

於久 あれは、羽田から飛行機で出かける時のことでした。早めに家を出たんですが、瀬田に向かう道路が大渋滞で動きがとれず、総理の出邸に遅れることが必至という状態になった時には慌てました。なにしろ、記者会見の資料は私の鞆の中にあるんですから。今なら、携帯電話で連絡できますが、当時はそんなものはない。やっと、道路沿いの電話ボックスを見つけて警視庁に電話、パトカーを救援によこしてもらいました。無線でSPと連絡をとりながら、用賀インターの入り口で一行と合流、総理車に乗り換えた時には、本当にほっとしました。長く警察官稼業をしていましたが、パトカーで、サイレンを鳴らしながら緊急走行してもらったのは、後にも先にもこれだけでした。

—— それから選挙ですが、大平政権ができた翌年の昭和五四年（一九七九年）は、春には統一地方選挙、秋口には衆議院議員の総選挙と選挙が二つもあって、大変だったでしょう。

於久 そうですね、選挙は期間が限られているものですから。統一地方選の時は、開会中だった国会の合間を見ては、天王山と目されていた東京の知事選を中心に応援に出かけました。投票前日の四月七日、たしか新宿でしたか、鈴木俊一候補を共同推薦していた竹入（義勝）公明、往々木（良作）民社と大平総理の三党首が一カ所に集まっただけの揃い踏み演説は、迫力があり壮観でした。一〇月の総選挙の時は、間に一日休養日を設けただけで、二〇日間の運動期間中、連日の出ずっぱりでした。チャーターした飛行機や列車、車で北海道から九州までを、文字どおりの東奔西走しましたので、私はワイシャツなどの着替えが底をついてしまい、家から官邸まで持ってきてもらって、閣議の日に取り替えたこともありました。

—— 帰りが遅くなったことも、しばしばあったとか……。

於久 応援はほとんどが街頭演説でしたが、遊説車の車上で演説し終わると車を乗り換えて次の会場へと、慌ただしくて大変でしたね。都下や近県の時は瀬田の総理私邸から直接現地に行くんですが、最後の演説が制限時間の午後八時近くになり、帰邸が遅くなることも珍しくありませんでした。あの広いリビングの大きなテーブルで、総理と志げ子夫人を前にして、夕食をいただいて帰っていたことを懐かしく思い出します。

—— 総選挙で大平総理は一般消費税の問題を言い出して、途中で引っ込めたわけですが、於久さんは一緒にまわらされていて、そのへんの雰囲気はどうだったのでしょうか。

一般消費税の問題をめぐる雰囲気

去 華 就 実

於久 私が本場に情けなかったのは、あの時ほとんど例外なしに、財政再建の必要性を訴える総理を横において、総理の応援を受けている当の候補者が「総理はあ言っています、私は自民党员ですが消費税には断固反対です」と声を張り上げていたことです。反消費税を売り物にしているんです。党本部に帰ると、今度は斎藤邦吉幹事長が「総理、もう（消費税を訴えることを）止めて下さい」と懇願するあり様でした。これが一番、総理には堪えたんだと思います。総理になられて、財政再建のきっかけをどうしても自分の手でつかまなければならぬという使命感を持っておられた。しかし、予算案が委員会で否決、本会議で漸く逆転可決といった、保革伯仲の現状ではどうにもならない。統一地方選挙がうまくいった、東京サミットも無事乗り切った、内閣と党の支持率も高まってきた。「よし、これなら多少の反対があっても乗り切れる」ということになって、安定多数を確保し消費税を実現するための解散に踏み切られた。ただ、消費税に対する反撥があれほど強いとは、多少計算違いをされていたのかも知れませんか。

——機が熟していなかったのですかね。

於久 そうかも知れませんが。総理は就任以来、折りに触れてこの問題を取り上げ、理解を得ようと努力しておられたんですが……。それにしても、総理は本当にツキがなかった。解散の直後に、鉄建公団のヤミ給与や公費天国の問題が起きて、反消費税の火に油を注いだ。そして投票の当日が、私ももし秘書官でなければ棄権したかもしれないほどの嵐になるなんて、誰も思わなかった。

——結局、自民党の中で寄ってたかつて総理の政策を引つ込ませたわけですね。

於久 政治家たるもの、たとえ不人気な政策であっても、それが国家一〇〇年の計のために必要とあらば、断固やり遂げる気概がなければと思うのですが、残念ながら、誰もついてきませんでした。総理は随分悩まれたと思います。たしか九月二四日、東京の深川でしたか、演説の最後のほうで「国民の理解を得られないまま増税するようなことはしない」といった、いつもと少しニュアンスの違う言葉が聞こえてきて、「とうとう旗を降ろされたか」となんととも言えない気持ちになりました。マスコミは一齐に「消費税断念」と報道しましたが、総理の儼然とした表情が忘れられません。

——読書を除けば、ゴルフが総理の唯一といってもよい趣味だったと思うのですが、於久さんは一緒にプレイされたこともあるのでしょうか。その辺については、いかがですか。

総理のゴルフにお供しての思い出

於久 本当に、よくお供をし、一緒にプレイをさせていただきました。実は、事務方の三人の秘書官で月曜から土曜までの六日を二日ずつ分担していましたが、日曜は特に担当を決めずにおき、そのつど、行事の内容で判断しようということにしていたんです。ちなみに、私は、水曜と土曜でした。言うまでもありませんが、何が起るのか分かりませんので、総理がお出かけになる時は、たとえプライベートな行動であっても、秘書官がつかないというわけには参りません。そこでゴルフの話ですが、一番ゴルフが好きで日曜に出易く警備陣との連絡もよい私が引き受けようということになり、特別な

実 場合は別として、喜んでお供をさせていただいていたわけです。

就 —— 大平総理のゴルフは、どんな様子でしたか。

去 華 於久 最も多く行かれたのは、茅ヶ崎にある「スリーハンドレッドクラブ」でした。遊説などの予定がないたまの日曜には、かねてのベット仲間の丸茶の佐々木栄一郎さん、第百土地の森美夫さんに私を加えて、よくラウンドされました。総理は服装にはわりに頓着がなく、夏には、よく腰に手拭いをぶら下げ、いかにも「お父ちゃん」のニックネームにふさわしく、飾らないお人柄そのものでした。

フォームは、膝で拍子をとる独特のもので、お世辞にも格好よくはありませんでしたが、ショットはなかなか力強く、小技もそこそこでした。もっとブレイに集中できれば、かなりのスコアで上がるこゝとができたと思うんですが、いかんせん、激務を縫つてのブレイではミスも多く、番記者からスコアを聞かれると「国家機密」と言つて、かわしておられました。総理は、ショットやパットでミスをすると「ご先祖様に申しわけない」とぶつぶつ言うのが口癖でした。たまに私がオナーになつて若さにかかせてぶつ飛ばしますと、後ろで何か呟いておられる。耳を澄ますと「雲か霞か」とか「ゴルフアーにはもつたない力持ち」とか、ぶつぶつ言いながらの、楽しいゴルフでしたね。

—— 雪の中でブレイしたことがあつたとか……。

於久 あれはオーストラリアなどへの外遊を二日後に控えた、昭和五五年の一月一三日の日曜日のことだつたと思います。目が覚めると今にも雪が降り出しそうな空模様で、おそらく中止だと思ひながら瀬田まで行きますと、ハーフだけでもやるうということになりました。メンバーは一人娘の森田芳子さんと三人。途中で小雪が降り出しましたが、スリーハンドレッドクラブにつくと、グリー

ン上には雪がまだ積もっておらずバットはできるとのことで、ともかくスタート。かじかむ手に息を吹きかけながら、なんとか九番ホールまでプレイしましたが、あんなに寒かったゴルフは初めてでした。

——外遊先のシドニーでもプレイをされましたね。

於久 本来は国内派の私ですが、この時は、たまたまお供をしていて、オーストラリアでの日程が無事に終わった最後の日、一月二〇日ですが、特別機が飛立つ午前一〇時までには、ハーフだけでもプレイしようということになったんです。朝食もそこそこにホテルを出て、シドニー郊外の名門コースに着いたのは午前六時過ぎで、九番ホールが少し離れているコースのレイアウトの関係があつて総理は大来（佐武郎）外相らと八ホール、私は後ろの組で七ホール回りましたが、爽やかな空気の中で総理はたいへんご満足した様子でした。

——総理はゴルフが本当に好きだったんですね。

於久 本当にお好きで、それが何よりのストレス解消法でした。ただ、忙しくてなかなかプレイができず、いささか欲求不満の様子が見られる時もありました。遊説の車中からゴルフ場が見えた時などは、平素は寡黙の総理が、よくゴルフの話がされました。古希の祝いに宏池会から贈られた立派なクラブは、とうとう使わずじまいになってしまいました。総理には、もっともっとゴルフを楽しんでもらいたかったと、つくづく思います。

——この後、総理は四月から五月にかけてアメリカ、メキシコ、カナダ、ユーゴと外遊するわけですが、於久さんは、もちろん国内で留守番なわけですね。

於久 そうなんです。総理が外遊される時が、私が唯一息抜きできる時だったんです。

——話は変わりますが、大平内閣の不信任案が可決された時、於久さんはどこにおられましたか。

不信任案可決を傍聴席で見る

於久 当日は当番ではなかったのですが、官邸にいました。どうも国会の様子がおかしいというので出かけ、本会議の傍聴席から様子を見ていたんです。ベルが鳴って与野党の議員が入ってきましたが、与党の議員は出たり入ったりでなかなか議席が埋まらない。雑壇の総理のところに、官房副長官の加藤紘一さんなどが慌ただしく行つては、何やら報告している。一たん席に着いた安倍晋太郎政調会長が同僚に連れ出される。最後に中曾根康弘議員が入ってくる。与党に多くの空席があるまま議場が閉鎖された時には、場内は騒然たるものでした。提出した当の野党までが、まさかと思つていた不信任案が可決されるという異様な雰囲気の中で、総理の、終始落ち着き動揺の気配を全く見せなかったあの姿は、私には非常に印象深いものがありました。

——国会では、当番の時には秘書官はどこにいるんですか。

於久 委員会の時には、秘書官席などにいますが、本会議は中に入れませんので、答弁資料を総理に渡して、総理が議場に入った後は、傍聴席で様子を見るが多かったですね。一度、こんなことがありました。傍聴席で聞いていますと、質問者が通告したものは違う質問をしている。これには驚きました。総理は普段、事務的な事柄は答弁資料にしたがって答えていましたので、このままでは

とんちんかんな答弁をさせかねません。そこで、大急ぎで手持ちの資料を修正し、階段をすっ飛んで、難壇の後ろの扉を小さく開けて監視を呼び、総理に渡してもらって事なきを得ました。今から思えば、よくもあんなことができたなと思います。

——それで運命の日の五月三〇日について伺いますが、大平総理は自民党本部での恒例の出陣式のと、安井謙候補の応援で新宿に行かれたわけですが、最初のうちの総理の調子というのはどうだったのですか。

運命の日・五月三〇日の見聞

於久　あの日は、迎賓館での中国の華国鋒首相の歡送行事の後でした。いつもしているように、遊説車から少し離れて、周りを移動しながら様子を見ていたんですが、こんな攻撃的で高揚した演説は初めてでした。総理らしくなかつたんです。私は、何がというわけではありませんが心配になって、居合わせた福川秘書官に、車に同乗して新宿での演説を聞いてくれるように頼みました。新宿につき、車から降りて演説の様子、聴衆の反応などを見ていたのですが、半ばを過ぎた頃でしたか、突然、総理の声がかすれ、少し低くなつたように聞こえました。驚いて顔色を窺つたんですが、離れていたこともあって、特別な変化は見られず、演説は無事に終わりました。

——それから党本部に戻つたんですね。

於久　午後は神奈川での秦野章候補の応援が予定されており、その間、党本部で食事をとることに

しておりました。党本部に向かう車中での総理は、大汗をかいて大変疲れたご様子でした。随分お供をしておりますが、こんな姿は初めてでした。総理は総裁室のソファーに横になって休息されたんですが、食欲がなく蕎麦も受けつけないご様子でした。伊東（正義）官房長官、斎藤幹事長なども駆けつけ、取り敢えず午後の日程をどうするかを瀬田のお宅とも連絡をとりながら検討されました。結局は「行く」という総理の意向もあって、予定どおり行動することになりました。

——その時「午後は無理ですから、止めたらどうですか」という意見もあつたのですか。

於久 「どうしますか」ということはありましたが、同日選挙の初日であり、総理の追い落としに熱心な反主流派の存在などを考えますと、中止は即、政治生命が絶たれることを意味していて、とても難しいことだつたと思います。ああいう状況では、勇気ある退却論などはとても無理でしょうね。

——そこで、総理の汗を拭くなど出発の準備をしたんですね。

於久 この日は、近間での演説で、着替えなどは持っていなかったので、総裁室の佐藤テル子さんにお願ひして、ワイシャツ、下着などを買ってきてもらいました。彼女は総理の汗を拭くやら、よくやってくれました。

——その間に福川さんが瀬田に連絡して、医者を待機してもらつたようでしたね。

於久 そうです。新聞記者に気付かれなため、総理が帰邸するまでに私邸に入ってもらつたように手配したようです。午後は横浜駅前を含めて四カ所で演説しましたが、だんだん元氣になられ車中での様子もいつもとあまり変わりがなくなりました。同行の記者諸君に演説の出来栄を聞いても「なかなかだ」という評価です。私は、医学の知識がありませんから、さすがは政治家、演説が疲労回復

の妙薬とはと、すっかり嬉しくなって、この様子を私邸にも連絡したものですから、瀬田のほうでも「あの変調は、このところの強行日程の疲れが出ただけで、大したことはないのでは」と幾分、樂觀的になったようでした。

——それで結局、医師の診断を仰いで、夜中に虎の門病院に入院ということになるんですが……。

於久 総理はさすがにお疲れのご様子でしたが、ともかく無事に瀬田に帰ってきました。そして、待機していた主治医の鶴巻（龍之助）先生に診てもらったんですが、専門家に診てもらう必要があるということ、邸内は一遍に緊張しました。密かにきてもらった専門家の診断は、即入院の要ありという厳しいものでしたが、邸内には番小屋があり、時事通信社と共同通信社の記者が詰めています。問題は、どうして気付かれず、騒がれずに入院するかでした。彼らは、私邸には、外部の人間は総理のお供をして中に入った私しかいないと思ってるわけですから、私が帰ったことにしようということになりました。それで時間を見計らって番小屋に「なにもありません」と声をかけ、いったん外に出て帰った振りをして、二男の大平裕さんのお宅の横から、また私邸に入ったんです。しばらくして、番小屋の灯が消えたので、私は横浜に住んでいるＳＰキャップの吉崎良宏警部に電話して、事情も説明せぬまま「タクシーですぐ瀬田までくるように、新聞記者には決して気付かれぬように」と、それだけを言ったんです。総理の身辺警護を担当するほどの男なので、機敏に行動してくれました。彼の手配で警察は隠密裡に動き出しました。

——それは何時ごろでしたか。

於久 まだ三〇日だったと思います。私は、その日は病院まで行かずに、瀬田で別れました。

——入院中に於久さんは何回ぐらい当番になったのですか。最後の日はそうでしたが……。

最後の六月一日にも当番だった

於久この場合も、三人の事務方で交代していましたが、四回ぐらいですか。当番の時、御札をもらいに行ったことがあるんです。宇野（宗佑）行管庁長官から「茅ヶ崎の寒川神社が大変ご利益がある」という話を聞いた伊東官房長官が、秘書官の誰かが御札をもらってきてくれないか、と言ってきました。そこで当番だった私が出かけたんですが、御被いを受けながら「総理の病氣平癒を神様にお願いするのに、自分が何も犠牲を払わずにいんだろうか」と考えたんです。私は元来、信心の薄い男ですが、この時は真剣でした。大好きな酒と煙草、どちらにしようかと考え、結局、煙草を断つことにしました。私はヘビースモーカーで、いつも鞆に二〇本入りの煙草一〇数個とライター数個を入れて持っていました。帰りの車の中で、運転を担当していた中辻長夫さんに処分するように頼みました。

——その時の禁煙が、今もつづいているのですか。

於久 総理が亡くなられた通夜の夜、安田正治さん（秘書官）が「於久さん、神様が言うことを聞かなかつたんだから、煙草を吸ってもいいんですよ。一本吸ったら」と誘惑するんです。「では、一本だけ」と、つい手を出したのが運の尽きで、禁断症状に苦しみながらも漸く軌道に乗ってきた禁煙が、あつという間に元の木阿弥になってしまいました。現在は、三回目の禁煙が、もう何年も続い

ておりますが……。

——六月一日の晩は木村貢さん（宏池会事務局長）もいましたが、於久さんは当番でしたね。

於久 最後の日は私が当番で、随分遅くまでいました。何もないことを確認して、記者諸君に「今日は何もありません」と言って帰ったんですが、もう日付が変わっていたかも知れません。家に着いたとたんに、S Pから「すぐ病院にきてくれ」という電話が入り、タクシーを拾って急行しましたが、病院に着いた時には心臓マッサージの最中でした。

——そういう意味では、於久さんが一番、最後の最後まで大平総理にお付き合いましたということになりますね。

於久 そうですね。終始お側にいただけに、何か他に手だてはなかったか、もし私に医学の心得があったらなどと、未だに悔いが残っております。

——結局、於久さんが大平正芳という人と付き合ったのは、総理在任中、亡くなるまでの一年半です。今、振り返ってみて、その一年半というのはどういふふうな感じがしますか。また大平正芳という人についての感想はどうですか。

総理の死は壮烈な戦死だった

於久 「初めまして」に始まって総理が亡くなられるまで、あつという間の一年半でした。いろんなことがあり、日本中をお供しましたが、こよなく家庭を愛し、わが国のあるべき姿を求め続けた、

人間性豊かな大平総理にお仕えできて本当によかったと思っております。総理については語り尽くされていきますが、私はなんといつても、あの誠実さ信念に対する頑固さこそが、大平総理の真骨頂だと思っております。だからこそ、誰もが腰を引く増税の問題に正面から取り組まれたんだと思います。それから、あのシャイな笑顔、これはなんとも言えず魅力的でした。私は、総理の死は、壮烈な戦死だったと思っております。直前の過酷なまでの内政、外交の日程。反主流派の執拗な抵抗によるストレスの蓄積。「おれは、頭は悪いが身体は丈夫だ」と冗談を言われるほど頑健な総理でしたが、とうとう限界に達してしまっただけです。総理の死で、自民党は奮い立ち、その熱気の中で衆参両院選挙ともに圧勝、念願の安定多数を手に入れることができました。総理は、政治家として、まさに最高の死に時を得られたのではないのでしょうか。ただ一つ、あれだけ理不尽な抵抗をし、散々総理を苦しめた反主流派の候補までが、総理の遺影を抱いて、「大平総理の弔い合戦」と叫んで当選していったのには、いささか腹が立ち釈然としないものがありました……。

(平成二二年二月二日 大平正芳記念財団事務所取材)

於久昭臣(おく・あきおみ) 一九三二年、大分県出身。五七年東大法

学部卒、同年、警察庁に入庁。七〇年警察庁捜査二課理事官、七二年国家公安委員長秘書官、七四年警視庁参事官兼人事一課長、七五年大阪府警交通部長、七七年警察庁教養課長、七八年大平正芳総理大臣秘書官、八一年警察庁人事課長、八四年警察庁刑事局審議官、八五年愛知県警察本部長、八八年関東管区警察局長、八九年退官。同年、日本道路公団監事、九五年日興証券顧問、現在に至る。